

〈研究ノート〉

盧溝橋事件の評価をめぐる諸問題

松田昌治

はじめに

約八年間にわたる日中全面戦争（一九三七～四五）の端緒となつた事件は、一九三七（昭和一二）年七月七日夜に中国・北平郊外の盧溝橋近くで発生した（厳密に言うとならぬ）武力衝突は七月八日早朝に始まる（一）、所謂「盧溝橋事件」である。この事件をめぐることは、その当時から現在にいたるまで、さまざまな評価があつた。すなわち、盧溝橋事件がどのような原因から勃発したかを分析することは、日中全面戦争開始の責任の所在をどこ（誰）に求めるのか、という議論に発展する可能性があるからである。

そこで本稿においては、盧溝橋事件が日中両国において日中戦争後から現在までどのような歴史的評価がなされてきたかを分析したのち、この事件の同時代における評価の問題を考えてみる。それは、この事件を当時の人々がどのように分析したのかを見ることによつて、現在の我々がこの事件を解釈する時に、何らかの示唆されるものが導き出せるかもしれないからである。筆者は、かつて「西安事

変と「中国統一化」論争」（『学習院史学』第三四号 一九九〇）という論文において、一九三六（昭和一一）年二月二日に発生した所謂「西安事変」を発端として、日本の論壇において行われた「中国統一化」論争を舞台とした、矢内原忠雄・大上末広・中西功・尾崎秀実・尾崎庄太郎などの現代中国社会に関する現状分析の論考を取り上げてみた。本稿ではその続編として、尾崎秀実（おざき・ほつみ、一九〇一～四四）の盧溝橋事件に関する論考を取り上げて、尾崎秀実がこの事件をどのように分析しようとしていたかについて考えてみたいと思う。

一 『国民の歴史』と日中戦争

ここ数年、従来の戦後の歴史学を「自虐史観」と批判し、新たに「自由主義史観」を標榜する「新しい歴史教科書をつくる会」の活動が注目を受けている。中でも、この会の会長である西尾幹二氏が一九九九（平成一一）年一〇月に刊行した『国民の歴史』が、二〇〇〇（平成一二）年一月には発行部数が七二万部を突破していると

いう。西尾氏は、この『国民の歴史』の「あとがき」において、自書について「日本から見た世界史の中にきちんと日本を位置づけるような日本史の通史を書きたかった⁽²⁾」と語っている。

周知のとおり、この『国民の歴史』には多くの問題点が存在しており、それに関しては、多くの歴史家からの批判がある。その中で特に注目すべきものは、この『国民の歴史』には、日本近現代史における、日清戦争に始まる日本の中国侵略拡大の歴史事実が完全に欠落している、という批判である。本稿でもこの批判を支持したい。この『国民の歴史』を見ると、西尾氏は昭和における日米人種戦争ばかり強調していて、日本の他国への加害・侵略の歴史を完全に無視しているのである。西尾氏にとっての昭和の戦争とは、アメリカとのそれしか視野に入っていないように思われる。一九三二（昭和六）年の九月一八日に勃発した満州事変に始まる日中間の約一五年に及ぶ戦争を視野に入れずして、果たして「国民の歴史」もしくは「日本史の通史」と言えるであろうか。

つぎに、注目すべき資料がある。明治大学の山田朗氏が、一九九九年（平成一一）年四月と二〇〇〇（平成一二）年四月に明治大学と東京外語大学の文系の三、四年生一八六名に行った、「戦争へのイメージ」と題する、〈歴史認識〉についてのアンケート調査である。この中で、「あなたは日中戦争についてどう思っていますか（複数回答可）」という問いに対して、最も多かったのが「日本による計画的な侵略戦争」（四三・二％）、つぎが「計画的ではないが、結果として侵略戦争となった」（二五・三％）、そして「分らない」も二一・一％あった。これに対して、「きっかけは偶然に起きた日中

両軍の衝突」（六・〇％）「中国側の抗日運動に対する日本側の自衛戦争」（一・八％）という回答は少数であった。この数字は果たして何を意味しているのか。

この結果を見ると、これらの学生は日中戦争に関しては「侵略戦争」のイメージが定着しているように思われる。しかし山田朗氏は、ここからあえて「分らない」という回答の多さに注目して、多くの大学生が近現代史の知識にはあまり自信がないが、戦争には「侵略戦争」であるというイメージを抱いていることを示している、という事実注目する。そこから山田氏は、この「侵略戦争」イメージの定着は、実は意外にもろい土台の上にあるとし、そこに小林よしのり「新・ゴーマニズム宣言スペシャル 戦争論」（幻冬舎 一九九八）や西尾幹二「国民の歴史」（前出）などの、歴史修正主義の論調が食い込む余地があるので、歴史教育者は、近現代史について言えば、戦争や植民地支配の実態を具体的に知ろうとする意欲と知識を学生が身につけるといふことを考えなければいけない、と主張するのである。

盧溝橋事件については、以下の章に見るようにさまざまな解釈がある。大きく分けると「偶発」説、「計画」説、の二つがある。しかし、この事件を発端とした、日中全面戦争を根幹とした日本の中国大陸侵略の行為はまぎれもない歴史事実である。本稿では、この点を特に確認しておきたいと思う。なお、日本の戦争責任の問題に関しては、稿を改めて論じてみたい。

二 盧溝橋事件の歴史的評価をめぐって (一)

繰り返すが、盧溝橋事件に関しては、今まで日中兩國においてさまざまな解釈がなされてきた。秦郁彦氏は、この事件の歴史的評価について、つぎのように分析している。戦後、一貫して中国側からこの事件が政治的に取り扱われてきた。すなわち、中国共産党政権(大陸)が国民党政権(台湾)を批判する材料としてこの事件を利用した。それは、盧溝橋事件は対日妥協に走ろうとする国民党政権を、中国共産党が徹底抗戦に追いやった記念すべきものであるという解釈である。この解釈は日本の歴史学者やマスコミも支持していた。そして、その流れの中から、事件自体が中国共産党の陰謀であるという議論も出てきた。しかし、戦後二〇数年を経過して中共政権が国連代表の座を獲得するにあたり、自信を持った中共は国民党政権のマイナス部分も含めて、この事件の責任をすべて日本へ押し付けるようになった。一方、台湾(国民党政権)は一貫して日本軍の陰謀説を譲らなかつた。そして秦氏自身は、盧溝橋事件の所謂「第一発」について、国民党第二九軍の下級兵士たちによる偶発的発砲と考えており、中共陰謀説も否定している。以上が秦氏の分析である。

日中国交回復(一九七二年)以前は、中国(大陸)政府は正面から日本の中国大陸侵略の行為を批判することは困難であった。それは柳条湖事件(満州事変)、南京事件にしても同様である。また台湾の国民党政権(中華民国)が世界的に認知されていた時代は、それより先にやるべきことがあったのである。そこで、盧溝橋事件を

国民党の批判の材料にするしかなかった。中国(大陸)政府が一八二(昭和五七)年夏の教科書問題に代表されるような、日本の中国大陸侵略の行為を大きく批判するようになったのは、ここ二〇数年のことである。

つづいて、江口圭一氏は同様の件についてつぎのように分析している。日本国内においては、柳条湖事件が関東軍幕僚の周到な謀略による計画的な作戦行動であったのとは異なり、盧溝橋事件は事前に仕組まれた計画あるいは謀略ではなく、偶発的な衝突であった、というのが通説となっており、江口氏ももちろんその説であるが、二つの異論が存在する。その一つは盧溝橋事件を日本軍の「挑発」あるいは「計画」とする中国の公式的ないし主流的な見解である。いま一つの異論は、盧溝橋事件を中国共産党の謀略・計画によるとする日本の一部で根強く抱かれている見解である。

この二つの異論のうち、前者の代表的な人物として江口氏が挙げるのが、歴史研究者の曲家源氏である。曲氏は一九九二(平成四)年、「国恥忘るべからず歴史叢書」の一冊として「盧溝橋事変起因考論—あわせて日本の関係する歴史研究者との意見交流」(中国華僑出版社)を刊行した。ここでは、盧溝橋事件に関する、秦郁彦氏をはじめとして、井上清氏、藤原彰氏、安井三吉氏、そして江口圭一氏などに代表される日本の研究者の諸説が具体的に取り上げられて、批判されている。曲家源氏は、この事件における「偶発」的か「計画」的かの問題について、この事件は「日本軍が自分で計画的にデッチあげたもの」であり、「盧溝橋事件の原因問題における日本の一部の歴史研究者の中国のそれとの意見の食い違い」は「根本

的な性質」があり、それは「歴史に対する基本的な観念の相違、あるいは民族的偏見から生まれた結果」である。そこから曲氏は、一部の日本の学者は、「狭い民族主義から出発して」「一部の侵略的行爲に対して意識的にか無意識的にかそれを弁護して」いる、と述べている。⁽¹⁰⁾ 江口氏に言わせれば、これは「批判というより非難」である。⁽¹¹⁾

なお、江口氏は先の秦氏に見られるような中国共産党と国民党の見解の相違についてはふれていない。

三 盧溝橋事件の歴史的評価をめぐる(二)

先の曲家源氏の見解を詳しく紹介した安井三吉氏は、基本的には盧溝橋事件の歴史的評価については江口圭一氏と同様な見解だが、つぎのようにも述べている。日本の研究者の多くは、盧溝橋事件を柳条湖事件と違って「偶発」的なものと見ているが、それはあくまでも事件の発端、もっと厳密に言えば「第一発」に関してのことである。一方、中国ではこの事件は発生当時から日本側の計画的「謀略」事件と見る見解が一般的であった。そして、その中でも「第二の九・一八」「計画的で順序だった侵略行為」という言葉は、当時から今日(一九九三年)に至るまで、また大陸の人、台湾の人あるいは華僑、華人を問わずほとんどの中国人、中国系人が盧溝橋事件に対して抱きつづけてきた、「いわば民族的感情と言うべきもの」を表している。⁽¹²⁾

そこから安井氏は、自分の盧溝橋事件に対する考えの骨子を示す。日中戦争は、日本の中国に対する侵略戦争であり、この点では中国

人の見解と食い違いはない。日本の陸軍は、柳条湖事件の過程において、すでに華北武力占領計画を検討しており、機会があれば実行しようとする構想はあった。そして、日中の意見の食い違いはこの点にあると考えられるが、支那駐屯軍が華北さらには中国全土の武力占領を企図して盧溝橋事件を引き起こしたという意味での日本軍「計画」説は正確ではない。さらに、盧溝橋での軍事衝突が、戦争の全面化へとなせ至ったについては、まず日本軍の大軍の出動があり、これに中国側も結局は抗戦に踏み切った。こうした両国の力の衝突が戦争の全面化を招来したのである。もちろんこれも、中国にも戦争拡大の責任がある、などと言うものではない。⁽¹³⁾ まさしく、安井氏の著書『盧溝橋事件』とは、盧溝橋事件の検討を通じて、日本と中国の間にある日中戦争に対する理解の相違についてできるかぎりギャップを埋めてみたい、すくなくともお互いの考えていることとどこが違うのかについて明らかにしてみたい、というのが執筆の目的の大半であった。

また、江口圭一氏も、一九八七(昭和六二)年の盧溝橋事件五〇周年の時の山東大学でのシンポジウムにおいて、「(盧溝橋一引用者)事件そのものは偶発的である。日本の帝国主義的侵略という問題と、事件が計画的であったか否かということとは次元が違う問題である。事件が偶発的であるからといって私は決して日本帝国主義の侵略性を否定するものではない(後略)」⁽¹⁴⁾ というようにコメントしている。

先の『国民の歴史』をめぐる議論の時に見たように、盧溝橋事件が「偶発」的か日本軍による「計画」的のものであるかにかかわら

ず、日中戦争時期における日本の中国大陸侵略行為はまぎれもない歴史事実なのである。それを再確認しておきたい。本稿では詳しく触れないが、周知のように、日本では鈴木明氏、藤岡信勝氏、東中野修道氏などのように、日中戦争における南京大虐殺「まぼろし」説を主張する研究者も少なからず存在する。しかし、これらの研究者は一九三七（昭和一二）年二月一三日に発生した南京事件における日本軍に殺された中国人の人数や、その中国人が捕虜か民間人なのか、などという議論に持ち込もうとしているが、それは問題点のすり替えではないかと思われる。日本軍が多数の中国人を殺傷したのは確かな歴史事実なのである。それが日中戦争におけるさまざまな事件を議論する時の大前提となるであろう。また、先に挙げた曲家源氏のような中国側の研究者によく見られる「民族的感情」を前面に押し出した議論もやはり不適當であろう。歴史事実を分析する時に、冷静な議論なくして、正しい方向に行くとは思えないのである。

むろん、日本側の盧溝橋事件「偶発」説の研究者も、一枚岩とは言えない。例えば、江口圭一氏はその著書「盧溝橋事件」において、秦郁彦氏が「支那駐屯軍」に対する「第二九軍側の行動と対応がもう少し慎重かつ適切であったら、盧溝橋事件は起らず、もし起きても局地紛争として収拾されたであろう」という議論に対し、「盧溝橋事件の実証的研究のバイオニアである」秦氏としては、「ひどく一面的な議論」である、としている。江口氏は、盧溝橋事件における七月八日午前五時三〇分の戦闘は、日本軍が「一方的かつ主動的に引きおこした」ことは、「議論の余地のない明白な事実である」

と主張する。⁽¹⁸⁾ 今後、盧溝橋事件の歴史的評価をめぐる議論は、さまざまな展開していくであろう。

そこで、本稿において盧溝橋事件の歴史的評価の問題を考える最後として、盧溝橋事件六〇周年の一九九七（平成九）年七月における「日中戦争」に関する姫田光義氏の見解を取り上げておくことにする。姫田氏によると、一九三七年の盧溝橋事件に始まる日中間の全面的戦争を「日中戦争」という。しかしこの表現は正確ではない。この戦争は中国におけるそれまでの日本側の一方的な侵略拡大に対して、ついに中国側が国を挙げて武力抵抗に踏み切ったことよって始まったものである。もしも中国側が不抵抗の姿勢をとり全面的な抵抗戦争に立ち上がらなかつたなら、日本は依然として「戦争」ではなく「事変」とか「事件」の連続として侵略を拡大しつづけたに違いない。つまり「日中戦争」なんてものは存在しなかった、のである。⁽¹⁹⁾ そこから姫田氏は、日中戦争とは中国側からすれば迫られて行わざるをえなかつた抵抗戦争（「八年の抗戦」）であり、民族の独立と解放を目指す「抗日戦争」であったこと、日本側からすれば強力な抵抗に出会い、全面的に引きずり込まれた一連の「対華侵略戦争」の帰結であるということができる。したがって、「日中戦争」という表現は公明正大ではなく、日本人としては「対華侵略戦争」というのが正しいと考える、と主張している。⁽²⁰⁾

この姫田氏の見解は、日中戦争における中国側の立場をやや強調しすぎた面があるとも言えよう。しかし、日本人として考えなければならぬ重要な歴史観を姫田氏は指摘していると思われる。すなわち、盧溝橋事件以前の日本の中国に対する侵略行為が、ついに日

中全面戦争の勃発を招いたのである。その導火線となったのが盧溝橋事件である。日中全面戦争を引き起こしたのは、日本側に多大な責任がある。そして、その後の侵略行為の拡大に関しても同様である。その歴史事実を日本人はよく認識するべきであろう。

それではつぎに、盧溝橋事件の同時代における評価の問題を、特に尾崎秀実の論考を例として考えてみたい。

四 盧溝橋事件勃発前夜

時代は一九三七（昭和一二）年前半、西安事変後の抗日統一戦線の結成により、日中関係は緊張の度合いを深めていた。この時期、尾崎秀実は、朝日新聞社の特派員として滞在していた上海から帰国してから五年後、「張学良クーデターの意義」（『中央公論』一九三七年一月）により論壇で注目を受け、「中国統一化」論争に参加することなどによって「中国評論家」としての地位を確固たるものにしていった。尾崎は、公の職業はもちろん朝日新聞社の記者であったが、彼の日中問題に対する発言は積極的なものであり、発言の場は『中央公論』『改造』などのリベラルな雑誌を中心としていた。

その中で尾崎が絶えず指摘していたのは、中国における民族運動の動向である。例えば、一九三七（昭和一二）年の『社会と国家』三月号の「戦争の危機と東亜」においては、尾崎は「我々は支那の民族運動の行方を見守る必要がある。ここ一兩年間支那に現れた民族運動の質的な転換は甚だ重要な示唆を我々に与えるのである²¹⁾」と述べている。この「質的な転換」とは、西安事変発生以後抗日統一

高揚を指すのであろうか。また、この論文で尾崎は日中戦争勃発の危機についても予想している。「戦争の破口は将来或いは支那に求められるかもしれない。しかしその場合においても終局的、決定的な戦争は：（伏せ字―引用者）行われるであろう。だから（危機が）（原文伏せ字―引用者）充分発展し、支那の民族運動が成熟しきった瞬間に行われる可能性が多いと思われる²²⁾」。中国の民族運動が「成熟しきった瞬間」とは、非常に微妙な表現ではあるが、この時期尾崎は日中全面戦争の勃発について危惧していた。

そして、同年四月には尾崎は昭和研究会に参加する。彼はここでは「支那問題研究会」に属し、六月にはその責任者になった。尾崎はこの「支那問題研究会」において初期には、「支那経済の特質、発展段階の検討、対支認識の是正ならびに確立」における、「支那における列強、ことに英国の勢力」について報告している²³⁾。尾崎のこの報告は同年五月に二回にわたってなされたが、彼は英国の極東侵略を歴史的に説明したのち、この後の英国の対中国政策の方向を決定づける最大の要因として①日本の対支政策、②支那の民族運動の二つを挙げている²⁵⁾。また、六月四日の中国問題についての第一回記名討論では、日本の対中国政策について論じられたが、ここで尾崎はやはり中国の民族統一運動について注目しており、ほっておけば日中関係の危機が強まる、としている²⁶⁾。尾崎はここでも一貫して中国の民族運動の動向と日中戦争の危機について論じていたことがわかる。

こうした中同年六月、近衛文麿が首相となり内閣を組織する。尾崎は近衛内閣について七月『壮年団』に、「近衛内閣と対支外交」

という論文を発表した。まず、尾崎はこう述べている。「近衛内閣の成立は、すこぶる暗澹とした日本政治の現状に、一脈の清風を送り入れるものとして一般に多大の歓迎をうけたのであった。ところで我々日支關係について深い關係を持つものにとつては、全く行き詰まり状態にある日支外交に何らかの局面轉換が行われ得るのではなからうかという期待を抱くことは、寧ろ当然なことではなければならぬ」。尾崎は、日中外交における近衛内閣の将来に大きな期待をかける。それはどのような期待なのか。

それについて尾崎は、従来の日本の对中国外交が陸、海、外務当局の間に方針の一致を欠き、また現地とこれら本国中央部との間において、はたまた現地におけるこれら相互の間において行動、方針が必ずしも円満とは行かなかつたことは「周知の事実」であるとし、それを原因とする「日本の对支外交の不統一に悩まされたのは、然し何も支那側ばかりではないので日本においてもつとにその必要が叫ばれ、軍部においてもまた一部に切実な对支外交統一の要望が起つたのである」として、現在の对中国認識の各層にわたる分裂を統一するためにも、日本の对中国外交の一元化の必要性を主張している。²⁸ 加えて尾崎は、日中両国は國際の立場と社会構成が違つたため、双方の理解が困難になっているため、我々にとつて必要なことは、「何よりも古き对支認識を清算し、正確に支那の現状を認識することから出発すべき」ことである、としている。³⁰

このように、尾崎秀実が近衛文麿新内閣に期待することは、对中国外交の一元化でありまた、中国社会に対する正確な認識であつて、そうすれば日中全面戦争は防げる可能性がある、と彼は考えたのか

もしれない。しかし、日中全面戦争勃発の日は、すぐそこまで迫っていたのである。

五 尾崎秀実「北支問題の新段階」

一九三七（昭和一二）年七月八日未明、中国・北平郊外の盧溝橋において発生した所謂「第一発」を発端とする日中両軍の武力衝突は、当初局地的に解決される見通しが現地の交渉において見えていた。盧溝橋事件勃発数日後の七月一日午後八時には、現地では停戦協定の調印が行われていた。しかし同日、東京では近衛内閣は臨時閣議で華北への派兵を決定して、午後六時三十分関東軍編成の混成二個旅団に、続いて朝鮮第二〇師団に華北派遣が発令された。³¹ 閣議が終わつたのち、午後五時三〇分風見章内閣書記官長は「今次の北支事変は其性質に鑑み事変と称す」と発表した。「事件」ではなく満州事変、上海事変と並ぶ「事変」である。³² 近衛首相は、この時出兵には本来反対であつたが、早急に出兵すれば不拡大方針で收拾できると考えていた、とのちに語つてゐる。³³

この閣議決定に先立つて尾崎秀実は、近衛内閣の強硬方針で破局になだれ込むのを防ごうと、風見内閣書記官長に懸念を伝え、さらに牛場首相秘書官にも話したが成功せず、翌日の七月一二日に盧溝橋事件についての初めての論文を執筆した。それは「北支問題の新段階」として、『改造』八月号に掲載された。この論文の冒頭において尾崎はつぎのように述べている。「七月八日未明北平郊外盧溝橋に於ける日支両軍の衝突は今や両国間の全面的な衝突を惹起せんとする形勢にある。恐らくは今日両國人の多くはこの事件の持ち来

すであろう重大なる結果につきさまで深刻に考えていないであろうが、必ずやそれは世界史的意義を持つ事件としてやがて我々の眼前に展開されるであろう⁽³⁵⁾。

この「世界史的意義」とは一体何であろうか。盧溝橋事件の勃発は果たして何を意味するのか。尾崎はのちに獄中における「手記」において、つぎのように説明している。「……私は昭和十二年七月十日北支事変に対する日本の強硬決意が決定された時支那事変の拡大を早くも予想したのみならず世界戦争へ発展することを断定し、それのみか、私の立場からして世界革命へ進展すべきことをすら暗示したのであります⁽³⁶⁾」。そして、この「北支問題の新段階」という論文についても、「世界史的意義を持つ事態に発展する⁽³⁷⁾」という曖昧な表現でこの意味を自分は表現したと彼は語っている。これから見ると、尾崎は第二次世界大戦の勃発まで見事に予想したことになる。ただその根拠は明確なものではない。

尾崎はつづけてこの「北支問題の新段階」において、盧溝橋事件の経過やそれまでの日中関係について概観したのち、つぎのように述べる。「北支問題は今日前に迫りつつある事件を契機として質的な転換を行おうとしているかに見られる。日本の立場から見れば、満洲国の接譲地として日本と密接な関係に立つ北支に期待するところが北支自体のみとの関係、交渉からは容易に得られないという事実が明瞭となり来たのである⁽³⁸⁾」。即ち、中国が変わりつつある。

尾崎は国民政府の国内統一は問題を新たな段階に進めたことから、「北支問題」の解決は国民政府との交渉なしには解決できない、としてこの問題を具体的に説明する。そして、「この『国内統一』は

決してその外形的な点を指すのではない。寧ろ実質的にはその内容であり促進力である民族運動の凝集力を指すのである⁽³⁹⁾」として、中国の「国内統一」は民族運動の凝集力により成されている、と尾崎は主張する。また、「北支問題は今や全支問題なのである。然も最も我々が重視するところは全支問題の意味が単に全支の統一政權たる国民政府の問題であるという意味でなく全支那民族を相手にして居るのであるという事実である⁽⁴⁰⁾」と尾崎は言う。この華北に起こった問題は即ち全中国の問題なのであり、日本は今では全中国の民族を相手にしているのである。「この意味は確かに我々が支那を即ち国民政府なりと見る場合より遙に深いのである。支那の最近における統一運動が国家的統一の問題たると同時に民族的統一戦線の問題であることは我々がしばしば最近とり上げて来た問題なのである」

「国民政府の持つ武力は恐らく大して問題ではないであろう、しかしながら支那の民族戦線の全面的抗日戦との衝突は遙に重大な意義を持つ⁽⁴¹⁾」。以上の尾崎の発言は、つぎのようなことであろう。もしも日中全面戦争が深刻化・長期化したら、日本は中国の全民族と相手に戦わなければならないが、それはもはや簡単に解決できる問題とはならないであろう。事実、日中全面戦争は約八年間に及ぶという泥沼化の状態に陥ってしまった。それは、日本が中国全土の「民族」を軽視したためではなかったのか。そして、この日中全面戦争は、世界戦争に発展する可能性のあることを、尾崎はこの時期に指摘したのであった。

以上が「北支問題の新段階」の概要だが、これまで見てきた論考の中で尾崎が指摘する、中国における民族運動をどのように解釈す

ればよいであろうか。井上清氏は、その著書『昭和の五十年』における日中戦争を記述した部分で、つぎのように述べている。「盧溝橋事件以後日本侵略者の前に立ち上がったのは、皇帝や軍閥ではなく、民族的自覚に燃える六億の中国民族大衆であった。その先頭には、大長征の勝利によって、その強大さを十分に実証した中国共産党が立っていた。蒋介石もこの民族の意志におされて抗日民族戦線を結成せざるを得なかった。あの広大な中国で六億の民族が団結して抗日に立ち上がったとき、日本が精鋭部隊をたとえ百万、二百万送ったとして、最後の勝利がどうして得られよう」。これを参考にすれば、尾崎の指摘する中国における民族運動とは、まさしく中国社会を国家統一の方向に指向させる中国のナショナリズム、もしくは中国の民衆（民族）のエネルギーのことであると思われる。もちろん、目には見えない「力」である。筆者はかつて、抗日統一民族戦線結成の契機となった「西安事変」について、中国のナショナリズムという、中国の民族的統一を模索する中国の民衆の強大な願望から発動されたものである、と指摘したことがあるが（前掲、「西安事変と『中国統一化』論争」、本稿の中国における民族運動もそれと繋がるものがあるだろう）。

六 盧溝橋事件の同時代における評価をめぐって

尾崎秀実は、「北支問題の新段階」を執筆した三日後の一九三七年（昭和一二）年七月一五日に「北支事変の意義」〔「財政」一九三七年八月号〕という論文を書いた（この論文は、『尾崎秀実著作集』に未収録のものであり、最近になってから今井清一氏によって発掘

されて、『ゾルゲ事件研究』にも掲載された）。この論文の冒頭において尾崎は、「この事件（盧溝橋事件―引用者）の意義は一般に考えられているように簡単なものではないと思われるのである。それは単なる少数部隊の衝突の善後処置という如き局部的な事件ではなく、実に日支両国の間に横たわる根本問題の解決に関するものであり、更に事態の進行如何によっては実に世界的意味を持つものに発展するおそれがある」と、再び盧溝橋事件の有する重要な意義を指摘する。そして尾崎は、この事件の持つ意味がすでに単なる北支問題の領域を出ており、それは実に日中問題全般としての解決が要請されており、ここに問題の質的変化があること、そして日本の中国に対する今後の交渉の相手方は表面的には国民政府であるが、実質的には「民族戦線」であることをはっきり知っておく必要がある、と述べている。ここでも尾崎は、日中全面戦争がその進行の如何によって、「世界的意味」を持つものに発展する可能性があり、また日本の今後の交渉の相手は実質的には中国の「民族戦線」である、「北支問題の新段階」における主張を繰り返している。

しかし、尾崎のこうした注意喚起に反して、日中全面戦争の局面は拡大する一方であった。近衛内閣は八月一七日の閣議で従来の不拡大方針を放棄し、戦時態勢上必要な諸般の準備対策を講じることとを決定した。また九月二日、それまで使用してきた「北支事変」の名称を「支那事変」と改称し、全面的な日中戦争の開始を政府は確認するに至った⁽⁴³⁾。尾崎はそのような状況の中、同年『壮年団』九月号には「日支戦争の展開」という論文を発表する。

尾崎はまずつぎのように述べている。「争端ははたして全支的規

模へと発展したのである。当局によって局地的解決の希望と意図とがしばしば繰りかえされたにもかかわらず、全支的規模への発展が避け難いものではあるまいかとの印象は、前に示したところであった。日支間の全面的な戦争が日本にとっても容易ならざる重大事であり、それがかなりの冒険的要素を含むものであることは識者のつとに知るところである⁽⁴⁶⁾。彼が危惧したとおり、日中戦争は中国全土に拡大してしまつた。それは日本にとってはますます事態の解決を困難にするものであつた。

そして尾崎は、戦局が急速に全中国的規模へと発展した理由については、日中関係の矛盾、相剋、行詰まりの深刻さに求めて、それは「北支事変の勃発が単なる偶然の小衝突によるものでなくして、実に日本の大陸政策の帰結の一端に突き当たつてゐるものである」と、しかしこれが根本的解決は全支的規模を要求するものであることは指摘した⁽⁴⁷⁾ことであるとしている。盧溝橋事件の勃発は、単なる小規模の日中両軍の軍事衝突にとどまるものではなく、日本の一九三一年（昭和六年）の満州事変以来の中国大陸政策の帰結の一端とも言うべき重大な事件であつた。これを根本的に解決するには全中国的規模の問題として扱わなければならない。尾崎はこうして日中戦争の前途を不安視するのである。

以上、盧溝橋事件勃発前後の尾崎秀実のそれに関連する論考をいくつか取り上げてみた。そこから、盧溝橋事件の同時代における評価の問題について考えてみたい。自分の現在目の前に起つてゐる事実について、同時代における評価を行うというのは大変困難なことである。だがその反面、その時代の状況を自分で肌身に感じるこ

とができるわけであつて、その時代の臨場感に直接触れることができる。そうした意味では、先に指摘した、中国における民族運動、言い換えると中国社会を国家統一の方向に指向させる中国のナショナリズム、もしくは中国の民衆（民族）のエネルギーなどは、その当時生きていた人でなければなかなか理解できないものではあるが、つぎに重要なことはその事実関係を正確に認識しなければならないということである。

それは、その時代の日本軍や日本政府は、その中国における民族運動の重要性を理解できていなかったからこそ、約八年間に及ぶ泥沼の日中全面戦争を続けてしまつたと指摘できるからである。また、盧溝橋事件自体は小規模な軍事衝突であつたかもしれないが、その時代にこの事件を分析するには、それまでの日本の中国大陸への侵略行為の経緯、そしてそれ以後起り得る事態も同時に視野に入れる必要があつたのである。目の前に起つてゐる事実だけではなく、その背後にある本質も考察しなければ、その事件に対する同時代における評価は無意味なものになつてしまつてしまつてしまうと言えよう。

筆者はかつて、尾崎秀実の「中国社会の発展方法を正しく見極めるための科学的方法」として、「中国をとりまく『国際関係』を重視する研究方法」と、「支那の民族運動」を重視する研究方法⁽⁴⁸⁾の二つを指摘した浅田喬二氏の説を紹介した（前掲、「西安事変と『中国統一化』論争」）。このうち後者の研究方法が、盧溝橋事件の同時代における尾崎の評価にとって有効なものであつたということは、本稿の中で指摘したことである。この、中国における民族運動の動向は、その時代の中国社会を分析する場合に、必ず視野に入れ

なければならぬものであったと言うことができる。

おわりに

本稿ではここまで、盧溝橋事件の歴史的評価の問題と、同時代における評価の問題を考えてきた。そこで最後に指摘しておきたいことは、まず、この事件をはじめとする歴史的事件の歴史的評価については、歴史事実をきちんと把握した上でなされること、すなわち後世の我々の都合のよい解釈によって歴史事実を分析してはならないことである。また、中国側の研究者に見られたような民族的感情を前面に押し出した歴史的評価も適当ではない。そして、同時代における評価を見て来た上で参考となることは、当時の時代背景を充分に考慮して歴史事実を正確に分析することである。現代の我々からすれば、それは非常に困難なことではある。しかし、その当時の時代における歴史事実の背後にある本質が理解できなければ、発生した事実の流れをただ追いかけていくだけのものになってしまう。その意味でも、ある歴史的事件についての当時の研究者が分析した論考からは、現代の我々にも示唆を受けるものが多分にあるように思われるのである。

本稿においては尾崎秀実の盧溝橋事件についての論考しか取り上げることができなかったが、そこにも現在の我々がこの事件の歴史的评价を考える時になんらかの参考とすべきものが存在していると言えるのではないだろうか。

補注

- (1) 江口圭一「盧溝橋事件と通州事件の評価をめぐって」(『季刊 戦争責任研究』第二五号 一九九九、三頁。なお、盧溝橋事件の具体的事実経過に関しては、江口圭一「盧溝橋事件」(『岩波ブックレット 一九八八』、安井三吉「盧溝橋事件」(研文出版 一九九三)、白井勝美「新版 日中戦争」(中公新書 二〇〇〇)などを参照のこと。
- (2) 西尾幹二「国民の歴史」(産経新聞社 一九九九、七六八頁より引用)。
- (3) 例えば、永原慶二「自由主義史観」批判」(『岩波ブックレット 二〇〇〇』)、「教科書に真実と自由を」連絡会編「徹底批判」国民の歴史」(大月書店 二〇〇〇)、今野日出晴「中学校歴史教科書との間」/大日方純夫「近代史からの解析」/君島和彦「教科書国際交流の経験から見た『国民の歴史』」(以上、「季刊 戦争責任研究」第二九号 二〇〇〇)、安田常雄「国民史」の発想と方法―『国民の歴史』の読み方について―(『歴史学研究』第七四二号 二〇〇〇)など。
- (4) 笠原十九司「日米人種戦争観の『妄想』―十五年戦争・アジア太平洋戦争認識」(前掲、「徹底批判」国民の歴史」)、二五九頁。
- (5) 山田朗「歴史教育と大学生の戦争認識」(『中央公論』二〇〇〇年九月号)、二六一―二六二頁。
- (6) 同論文、二六三―二六五頁。
- (7) 坂本多加雄・秦郁彦・半藤一利・保阪正康「昭和史の論点」(『文春新書 二〇〇〇』)、八〇―八二頁。
- (8) 同書、八二頁。
- (9) 前掲、江口圭一「盧溝橋事件と通州事件の評価をめぐって」、四頁。
- (10) 前掲、安井三吉「盧溝橋事件」、三〇六―三〇七頁。
- (11) 前掲、江口圭一「盧溝橋事件と通州事件の評価をめぐって」、四頁。
- (12) 前掲、安井三吉「盧溝橋事件」、一八一―二〇頁。
- (13) 前掲、安井三吉「盧溝橋事件」、二〇―二二頁。

- (14) 《座談会》野村浩一・西村成雄・江口圭一「世界戦争のなかの日中戦争」《世界》第六七号 一九九七、一三三頁。
- (15) 参照、鈴木明『南京大虐殺』のまぼろし(文藝春秋 一九七三)、同『新「南京大虐殺」のまぼろし』(飛鳥新社 一九九九、藤岡信勝・東中野修道『ザ・レイプ・オブ・南京』の研究』(祥伝社 一九九九)など。
- (16) 前掲、『昭和历史の論点』、八二―八四頁。藤原彰『新版 南京大虐殺』(岩波ブックレット 一九八八)、二〇―二四頁。
- (17) 前掲、江口圭一『盧溝橋事件』、三六頁。
- (18) 前掲、江口圭一『盧溝橋事件』、三六―三七頁。
- (19) 姫田光義「日中戦争とは何だったのか」《世界》第六七号 一九九七、八七―八八頁。
- (20) 同論文、八八頁。
- (21) 『尾崎秀実著作集』(勁草書房版、全五巻 一九七七―七九)第一巻、一〇頁より引用。
- (22) 同右、一〇頁より引用。
- (23) 昭和研究会とは、一九三三(昭和八)年後藤隆之助が蠡山政道・佐々木弘雄などと図って創設した国策研究団体で、近衛文麿、風見章らとその設計計画を支持した。ここでの研究活動の成果に基づき政府に進言して、国策に織り込ませることがこの会の目標となった。参加者は橋樑・三木清など、革新的な人物も多々いた。参照、後藤隆之助監修、昭和同人会編著『昭和研究会』(経済往来社 一九六八)、酒井三郎『昭和研究会』(TBSブリタニカ 一九七九)。
- (24) 前掲、昭和同人会編著『昭和研究会』、一四二頁。
- (25) 同書、一四二頁。
- (26) 同書、一四二―一四五頁。
- (27) 『尾崎秀実著作集』第一巻、二三四頁より引用。
- (28) 同右、二二六頁より引用。
- (29) 同右、二二六頁。
- (30) 同右、二三八頁。
- (31) 前掲、臼井勝美『新版 日中戦争』、六五―六八頁。
- (32) 同書、六八頁。
- (33) 岡義武『近衛文麿』(岩波新書 一九七二)、六四―六五頁。
- (34) 今井清一「著作から見た尾崎秀実の中国認識」《中国研究月報》第六一―号 一九九九、四〇―四二頁。
- (35) 『尾崎秀実著作集』第二巻、六〇頁より引用。
- (36) 『現代史資料』②「ゾルゲ事件」(二)(みすず書房 一九六二)、一〇頁より引用。
- (37) 同書、一〇頁。
- (38) 『尾崎秀実著作集』第二巻、六四頁より引用。
- (39) 同右、六五頁。
- (40) 同右、六五頁より引用。
- (41) 同右、六五頁より引用。
- (42) 井上清『昭和の五十年』(講談社現代新書 一九七六)、八八頁より引用。
- (43) 今井清一編集・解説『尾崎秀実の「著作集」等未収録著作(続の二)』《ゾルゲ事件研究》第四号 一九九八、三三頁より引用。
- (44) 同右、三四―三五頁。
- (45) 前掲、臼井勝美『新版 日中戦争』、七九頁。
- (46) 『尾崎秀実著作集』第一巻、二四四頁より引用。
- (47) 同右、二四七頁。